第 28 回 日中戦争史研究会・議事録

2016 年 4 月 23 日（土）13:00～16:30 愛知大学名古屋校舎厚生棟 W32 会議室

参加者（署名前後順、敬称略）

市川憲一（愛知大学 OB）、矢久保典良（千葉商科大学非常勤講師）、渡辺興司（なし）、奥村哲（首都大学東京名誉教授）、曽根英羽（愛知大学現代中国学部）、馬場毅（愛知大学名誉教授）、ハクナルス（愛知大学現代中国研究科）、野口武（愛知大学研究員）、成瀬公策（名古屋市役所）、高明潔（愛知大学教授）、鮑麗達（愛知大学）、水野光朗（都留文科大学）、長谷川満（なし）、岡崎清宜（愛知県立大学非常勤講師）、堀井弘一郎（日本大学非常勤講師）、王広涛（愛知大学研究員）、森久男（愛知大学教授）

報告 1　日中戦争期における中国ムスリムの「生存戦略」と「社会改良」の試み
――中国回教救国協会の言説と認識を中心に

矢久保典良（千葉商科大学非常勤講師）

【質疑応答】（司会：森久男）

森：近年、日中戦争期における中国のイスラム研究は結構盛んになっていますが、研究領域は非常に幅広いという事情があって、なかなか全体を展望したものはありませんが、今日の報告はこの日中戦争期の中国ムスリムに着目し、国民政府の抗戦戦略の中でその意味を位置づけることによって、ムスリムが政治権利の工場をはかるという流れで説明されたのではないかと思います。ただいまの報告について、なにか感想や意見がありましたら積極的に発言をお願いします。

森：日中戦争期の中国ムスリムについては、日本支配地域なのか、或いは国民党支配地域なのかによって研究対象が区分されますが、後者の国民党支配地域の中では、回教軍閥の支配地域はまた特異な性格を持っています。今日の報告の内容は国民党支配が強い地域を中心とした考察であったと思われますが、中国ムスリムの全体の中ではどのあたりのムスリムを指していますか。

矢久保：はい、ありがとうございます。僕の説明が少し足りていないところがあります。今日扱った中国ムスリムというのが重慶国民政府の実効支配地域にいるムスリムたちということになります。日本が行った地域、日本のイスラム工作が強かった地域、日本に近い立場の人たちが作った団体には全く触れていません。一応西北地域も重慶政府の支配以外ということで、白崇禧はかれらを仲間として見做していましたが、中国回教救国協会もそれを支部として認めましたが、西北地域の独自性が強いため、今回の報告というのは内地特に重慶周辺とした西南地域という要素が強いと思います。あと、僕湖北省に留学した経験があって、そこで見えた湖北省の档案を見たというので一部例として湖北省を扱った

んです。湖北省も意外と中国回教救国協会の前身となる団体があったりとか、中国回教救国協会に関わるような行動が行っていたと思います、その早い段階に限りますが。お答えになっていないかもしれないですが。

森：今日の報告の中で白崇禧は、回族とは言っても、国民党の有力な軍事リーダーで、少し特別な位置にあります。今日報告された中国回教救国協会に参加して、活躍していたのはどういうような人たちであったかというような人物のイメージについてお伺いしたいと思います。具体的にどういう政治勢力と結びついていたのか、彼らの位置づけ、あるいは政治的発言権という主体的な部分について、少しはっきりしていないように思われます。

矢久保：中国回教救国協会に加わっていた主体的な人たちは民国前期以来の改革派と言われている人たちで、いろんな人たちがいます。改革派の宗教指導者であったりとか、エジプトとか、トルコとかに留学して帰ってきた人たちとか、近代の普通教育を習ってそういうのを推進していこうとした人たちが中心として動いでいた。いろんな人々が混ざって、それぞれの近代化みたいなものを中国各地で行っているような人たちが武漢で集まって、そのあと重慶政府側に行ったという要素が強いです。彼らの共通点というのが、自分たちの社会の改良をして、自分たちが社会を改良するために改革しなければいけないと思っていた人たちです。特に、教育と組織化というものを重視してきまして、それで政治志向性というものがズレがあったと思います。

森：今の話ですと、活動家の中には近代的教育を受けたインテリが結構いたということになりますね。モンゴル族の教育制度は南京国民政府の時期にかなり普及しています。他方、同時期の国民政府は少数民族の統治にあまり力を入れていなかったという批判があります。そうすると、南京国民政府の時代に育成された少数民族のインテリが抗戦期に全面的に出てきて、社会的地位の向上をはかる動きであったとみてもよいですか。

矢久保：南京政府、そしてもうすこし前ぐらいに育てきたインテリだと思います。

高：まず一番目の問題ですが、森先生に確認された部分とつながっていると思います。近代以降の回族の知識人たちについて、矢久保さんはご報告のなか、トルコに留学したのは多いといっていましたが、実際に多いかどうか知りませんが、私が知っているところがほとんどがエジプトの大学に留学したか、そして東京に留学するという形になっています。特に日本に留学した回族留学生が「醒回篇」という雑誌を編集し、「愛国」=「愛教」ということを主張します。「救国協会」に関係した人物、内部の階層とりわけ西北地域にいる回族軍閥「馬家軍」の状況などを調べた方が良いと思います。彼らはむしろ西方地域の抗日の主力ではないかと思います。また、「社会改良」はどういう人たちにとっての「社会改良」なのか、回族の人たちの中でどんな階層に向けての社会改良なのかということです。近代以降におけるムスリムの社会改良・生存戦略なのか、それとも日中戦争に限定した社会改良・生存戦略なのかという区別ですね。これはかれらのW・アイデンティティにつながると思いますが。中国人である同時に、ムスリムであるということをどういうふうに示すことが一番重要であると思います。

馬場：当時日本のイスラム工作に関する研究がやられているのですけど、そういうものに対する言説というのがないのですか。

矢久保：そういうのがあります。偽の団体を作るとか、そういうような言説があります。

馬場：「権利拡大」という点についてどうですか。対日協力者などについて、日本はそれなりに、（中国ムスリム）引き付けるため、そういうことに対する分析あるいは批判はどうですか、実際に言説のなかで。ご研究のなかで触れていますか。

矢久保：触れていますが、今どういうふうに言っていたのかちょっとあやふやですけど。日本の話に対するような論説というのはあります。

馬場：例えば、アジア太平洋戦争が始まった時に日本国内で「回教圏」研究所があって、大川周明なんかそういうのも研究してたんですね。それなりに日本側一生懸命イスラムを研究し、戦線が拡大していくと、関心を持っています。ですから、そういう動きに対抗して国民政府のなかで何か言っていないのかということについてお聞きしたかったのです。

髙：当時、張家口にある「回民女子学校」の教諭が日本人です。それは蒙彊政策につながるかなと思います。中生勝美さんが書いた本ですが、もっぱら戦争期日本における回民社会についての考察です。その辺は国民政府とのつながりがあるのではないかと思います。

矢久保：対抗していることは対抗しているんですけど、蒙彊の話を言っているのは僕は思い出せないんです。具体的に日本の回民政策に対して重慶政府が何か西北の話をしている、蒙彊の話をしているというのは今僕はぱっと出てこないです。

堀井：レジュメ１ページに「中国ムスリムとは何か」というところで「回教民族説」「漢人回教説」がありまして、とくに日中戦争当時「中国回教救国協会」は政治的な「戦略」として「漢人回教説」として立場を採用することがよくわかりますが、その中の議論に関して、「得策」とは言えるんですが、やむを得ないという立場に躍ったのか、それともやっぱり自分たちが回教民族なんだけども、当面已む得ず「漢人回教」という位置づけでやり過ごそうとしたのですか。そのあたりの議論は自分たちのアイデンティティ、本質的な所ではないかなと思いますけど、その辺はどうなっているかとお聞きしたいです。
　もう一つは、先ほど議論した日本側の回教政策と国民政府の回教政策、そして共産党統治下の回教政策もありますが、その三者の交渉というか、接点というか、特に共産党統治下の回教政策と重慶政府との接触、衝突については教えていただければと思います。

矢久保：一点目の「漢人回教説」については、実は戦争前に「回教民族説」「漢人回教説」といういろんな意見が出てきました。「漢人回教説」に関しては確かにご指摘されましたように両方の可能性もあります、それに関しては山崎典子さんの研究は少し触れています。もう一つ、共産党統治下における回教政策に関して、重慶政府との接触とかについて、確かに共産党統治下にそのような団体があります。それに関してはあまりよくわからないで、中国の研究者とか日本の研究者とかあまり触れていませんので、僕もその実態がよくわからないです。

森：「漢人回教徒」というのが国民政府の公式見解ですか。

矢久保：そうです。途中から 1939 年か 1940 年か国民党の公式見解になりました。

高：民国時代で今「回族」と呼べれる人たちがどうして蔑視されたのですか。当時彼らは「回族」という一つの独自の民族団体とは認めされなかったんですよね。「回族」という読み方は何時頃から登場してきたんですか。

矢久保：「回族」ですか。

高：はい。これは多分 1930 年の共産党の民族政策につながっています。

矢久保：1920 年代からすでに「回教民族説」といういい方が出てきたのですが、「回教民族」を略して「回族」、その中でいろんな人が言って、「回教民族」とは「回教」を信ずる人を指す人もいれば、トルコ系の人を指す人もいます。

高：それに関しては、これらの回族のたちはどのように認識したのか、当時の第一次資料を読まないとわからないと思います。例えば、中国共産党は南から延安に移動した途中ではじめて回族の自治政権を設けたんですよね、「回族」といういい方がそこで初めて登場してきたのです。そこで、1942 年延安で「回族民族研究会」を設けたのです。

高：中国ムスリムの「生存戦略」と「社会改良」のために主な手段はなんでしょうか。これはすごく重要だと思います。そのなかにトルコ系などのムスリムに対してどのようにして改良したのですか。モスク教育ではほとんどアラビア語教育で、改良のためには何か新しい戦略があったのですか。

矢久保：普通教育・近代教育というのは、いままで行ってきたアラビア語教育とかペルシャ語教育でコーランとか簡単なアラビア語の読み書きとか、暗誦とか、そういったものが中心だったものを中国語の漢字の読み書きとかをやろうということです。そういうものができないと、仕事とか教育とかの機会が無くなると、そういうふうに中国回教救国協会が師範学校を作ってやっているのです。

高：ムスク教育の内容は主に経典教育、特にコーランですよね、学校教育の内容は具体的に何がありますか。

矢久保：学校教育の内容って、小学校とかで何をやるかということですよね。内容は前のとだいぶ違います。

高：矢久保先生がご指摘された近代化について、具体的に「近代化教育」とは一体どんなものですか。

田久保：「近代化教育」に関しては多分僕の言い方が悪かったかもしれません。「近代化教育」ではなく「近代教育」であります。僕指したのがモスクとかという教徒教育と違って、一般的な学校教育、普通教育で、科学知識とか、数学とかというような教育であります。

高：これに対して、もし事例があれば、例えば「成達師範学校」の教育内容の中で、自分の社会改良を行うために、回民族の子弟にたいしてどんな学校教育を行ったのか、これは社会改良の核心で、昔のモスク教育と違った教育だと思います。これこそが社会改良の基礎的な部分です。事例を取り上げないと、単にムスリムの社会改良とかいうとちょっと。

高：それから、「回族」出身の知識人は日本留学を選んだ背景は何でしょうか。清末時代に多くの中国人は欧米の国々へ留学するに対して、回民族の知識人はみんな日本を選んで留学したと、これは多分「社会改良」にもつながっています。

矢久保：ありがとうございます。僕の言葉で使い方がちょっと混乱させるような、分かりづらいという話になってしまって、もう少し幅広く背景とかを入れてちょっと考えいきたいと思います。この報告自体は、実証的な話とか個別的な話とかあくまで例だけにして、それ以外をトピックとして植え込んでという形になってしまったのです。このタイトルについて、『日中戦争期における中国ムスリムの「生存戦略」と「社会改良」』というタイトルで報告させていただいたんですが、この間提出した博士論文で日中戦争期の中国回教救国協会というものを扱って、彼らの認識にポイントがあったもので、そのなか出てきた結論みたいなのは「生存戦略」であり、結論が先に出てきたという感じがあります。

高：分析型の研究なんですよね、実証型の研究ではないですよね。

矢久保：実証的には、今までやってきたものはあるんですけど、今回は先に問題提起にして、結論から言った形になってしまうんです。

奥村：5 頁のところですが、「漢人回教徒説」というものがありまして、これは「中国回教救国協会」がイメージして、「中華民族」的な表現で、実際に中華民国の統治下に入っているかどうかわからないですけど、ウィグル族とか、その辺はどういうふうに認識されてきたのでしょうか。それから、戦争期に動員によって国民政府の協力者となる場合もあるのですけど、非協力的な立場の少数民族、また反発した人もあると思います。勿論普通の庶民レベルですけど、これはただ回族だけではなく、民政庁はどういうふうに取り扱ったのですか。とりわけ政府側の動員・説得の方は？

矢久保：「中国回教救国協会」というのは回族に対象ではなくて、ムスリムを信ずるすべての人々を対象にしているわけであります。もちろん、トルコ系のムスリムたちにとっては受け入れることが難しいが、一応対象としています。つまり、民族を超えて宗教の立場で取り扱うのです。僕が扱ったのインテリ層つまり上の話になりますが、基層社会での挑発とか確かに宗教の話ですから、回教の場合だと「食事」は揉めますよね。具体的に一次資料を見たことがないですけど。

報告 2　日中戦争の歴史的位置

奥村哲（首都大学東京名誉教授）

【質疑応答】（司会：森久男）

森：社会主義体制の捉え方として 20 世紀の「総力戦」に対応した後進国の総動員体制であったと位置づけ、中国を研究対象としたさまざまな考え方、そして現在の心境が語られたではないかと思います。只今の報告について、ご意見のある方は発言してもらいたいと思います。

馬場：いつも挑戦的で大変面白い話を聞かせていただいて、今日も「総力戦」という総動員体制も大変面白い話だと思います。社会主義体制の基本的特徴、「政治・経済・社会を党=国家が一元的に掌握・運営する体制」という定義自体は私自身も基本的に賛成ですけれども、今日はあまり強調されていないが、こういう体制が中国で成熟したのはたとえば人民公社とは、やっぱり朝鮮戦争を契機になったかもしれないけど、いわゆる社会主義体制というのは 1956 年に完成したと言われていますね。それから、日中戦争期の総力戦云々なんですけど、国民政府の場合に関して、四川省の場合、これはやはりある種典型的な例だと思いますし、こういう総力戦という志向があるのだという点は私は非常に同意できるんですけど、国民政府の場合に、四川はちょっと特殊的、典型的な事例なんで、そもそも国民政府にとって限られた省だけに対して、総力戦といえるかどうかという問題。それから共産党も、私はちょっと山東省の抗日根拠地について調べてみているのですが、私は抗戦期における共産党の動員はちょっととても総力戦とは言えないではないかと思います。たとえば、日中戦争期だったら農民は動員がいやなら日本軍の占領区とか国民党の統治下に行くんです。それはやっぱり社会主義段階が全く異質だとか考えています。それでもう一つ時期的にですね、1941 年から 1942 年にかけて日本軍の治安強化運動でやられますから、総動員はそれ以後なんですね、村落支配とかその抗戦終了までのわずか三年弱で行う。。そこでも実態を見ても、1944 年から 1949 年ぐらいまで何とか軍事動員というようなものが見られて、という非常に限られた時期だと思います。内戦期では一生懸命総動員しようとしているんだけど、やっぱり社会主義段階の動員とはいえないと私は見ています。

奥村：結局、総力戦態勢といえるのはやっぱり社会主義体制ですよね。ただその前の戦争をどう見るかということだと思います。総力戦という言葉をあえて使っていたんですけど、むしろ総力を挙げて戦うという感じ、実際にはそうですね。こちらのほうでは、恰好付きな総力というんですが、でもやっぱり軍閥時代の性格と違うわけで、そこはやっぱり無理があるんで、たしかに総力をあげようとしたけれど、実際に抑えたということになってしまいます。単に総力戦であるかないかというよりは、やっぱり総力戦ではないという結論はちょっとまずいだろうと思います。

馬場：山東省の場合だと、1943 年から省政府が無くなっちゃうんですよ、東北軍と一緒に安徽省に移動して、そして残される国民党正規軍が地方軍になっちゃうんで、そして日本軍と共産党の八路軍に挟まれるという結果になって、日本軍に投降する。だから当時山東省は傀儡軍が多いと言われています。こういう省政府もない状態で、中央政府の方針がやはり貫けない。いくら重慶政府が総力戦をやろうとしても、省レベルでもできない。だから私は実際に総動員といえるのは四川省だけだと思います。

奥村：でも実際に拉致したり、兵士が逃げるんですよね。本当の意味の総力戦はやっぱりできないです。そういう点では、四川省も同じです。確かに、四川の場合は動員のレベルが高い、ほかのところが低いというしかできないと思います。

森：総力戦と言うには、総力戦をやろうとという意欲がないといけませんが、彭徳懐にはその意欲があると思われますが、毛沢東にはその意欲がまったくないと思います。ウィットフォーゲルはソ連社会主義や中国社会主義を東洋的専制と定義しています。こういう大ざっぱな指摘であっても、それなりに説得力があると思いますが、いかがですか。

奥村：いや、僕はそれがおかしいというのは、理論とか、東洋的専制というのは 20 世紀からのことではないですよね。20 世紀の総力戦はやっぱり時代の産物でありまして、共産党の独裁も、そのことを抜きには、僕はあり得ないと思います。それをアジア的というかたちで、そういう地理的な話というと、僕はやはりそこがおかしいじゃないかなと思います。

森：ウィットフォーゲルは、20 世紀だけではなくて、古代以来ずっと独裁的な特徴が続いているとみなしています。

奥村：それはずっと変わらないという訳ではないです。何故かというと民主化する以上はどこも専制ですからね。

森：昔の中国社会主義というのは分かりやすかったですが、今の中国社会主義というのはなんだかよくわからないですね。

奥村：今の社会主義というのは、僕はそれが実質的には棚上げだと思います。もし実質を求めるとすれば、共産党の一党独裁ぐらいだろうと思います。

森：今の中国共産党に自の社会主義を支える一党独裁の根拠となるロジックというものががあるかどうか…

奥村：もうないと思います。

森：共産党一党支配のほかに、なにか正当性を主張するロジックとなるものはだんですか。

奥村：1980 年代にはあったんですね。いわゆる中国はまだ社会主義の初級段階だと、生産力を発展して高級段階にすればもっと良いものがあるというか。1980 年代、趙紫陽なんか言ったはずですが、初級段階から高級段階にするために、生産量を上げなければならない、生産量があげるとどうするかというと、市場経済を全面的に推進ということになっちゃって、それで何が社会主義かもうわからなくなってしまう。結局初級段階論、僕がそこで破綻してしまったと思います。言い換えれば、残るのは共産党一党しかないということです。マルクス・レーニン主義は別に排除していないですけど、じゃあどこでマルクス・レーニン主義を体現しているのか、共産党はもう階級制度ですらないじゃないというか、自分でも見ていますから。

森 : マルクス・レーニン主義、毛沢東思想を今でも共産党の指導思想として掲げていますが……。

奥村 : だから棚上げで、実際にはそういうものはもうないと私思います。

森 : 毛沢東思想というのは今ではむしろ危険思想ですね。表面的には高く評価するんですが、実際にはまったく評価しないで、ただの飾りになっているということですね。

奥村 : 只今の中国の格差がひどくなってきて、一部の人が毛沢東時代の見直しみたいな主張がありますが、毛沢東時代というのはやっぱり冷戦時期の産物だと思いまして、昔に戻るというのは不可能な話だと思います。

森 : 政治的な求心力を維持するという意味で毛沢東は天才的な人物ですね。　今の習近平も多少そういうことも真似をしようとしていますね。習さんに対する指導核心という言い方は、ちょっと毛沢東と似ていますね。しかし、毛沢東は天才だから、できたわけで……。

奥村 : いや、やっぱり冷戦という危機的状況があって、危機感が一人の権力に集中させるという結果になってしまうと思います。

森 : 一人に権力を集中しないと、国をうまく指導できないという考えはまだ根強いでしょう。

奥村 : それは冷戦という時代背景を考えると、やっぱり弱いから権力を集中すると、スターリンのソ連だって、冷戦期においてはアメリカと比べて、弱いといえますが、ですからよわいからこそ、逆に団結して、権力を一人に集中させるという行動が出ます。

堀井 : 『中国の現代史』という本は 1999 年に出版されたんですが、最初読んだときになるほどこういうふうに解釈できるんだと、自分の中で納得したというふうに思います。今日はご報告のなかで、3 ページ「国共内戦」のところに、共産党の勝利に関して、国民党の都市部の維持ができなくなってきたと言われますが、その辺はもうちょっと教えていただきたいです。また、共産党側の手段について、勿論さまざまありますが、そのなか民意の調達ができたというのは一つ重要な手段だと思います。その辺はご報告のなかであまり十分に重視していないのではないかというふうに考えおります。もうひとつ、中間層の調達というのは、やっぱり共産党は国民党よりうまくやったのではないかなと思います。その中間層の動向について、少し教えていただければいいかなあと思います。

奥村 : 共産党は民意を掴んだからということはよく言われるんですが、僕は当初そうかなあというふうに思います。最近の研究を見てると、やっぱりそうでもないという感じですね。かなり暴力的ですね、拉致もやっているし無理やりにするところもあると思います。田中恭子さんの本なんかちょっと誤解を招く恐れがあると思いますけど。やっぱり基本的には暴力、支配と共産党はしたんです。そして、何でこの共産党の軍事的な勝利を強調するかというと、この本で共産党が勝利した要因は「共産党が政府批判勢力を総結集したという政治的勝利が最も大きな理由」だと、政府批判勢力は中間勢力も含まれているわけですね。それに対して、第二の要因というのは「土地改革」であると。中間層とかそれは結

局部分的な要素であり、なんといっても軍事的な勝利が第一であるというふうに考えております。ですから、中間層というのも、結局二者択一のなかで国民党は腐敗しているとか、そうしたら共産党の方に行きたいという形で、それはありますけれども、それを政治的に見れば宣伝的な部分が大きいだろうともいますけれど、国民党に勝利するのはなんといっても軍事的勝利だと思います。

堀井：軍事力で圧倒すると、当然それが兵力が要るわけで、兵力を調達するときに、やっぱり人的な動員を可能にするシステムが必要ではないか、その辺はどういうふうに考えられますか。

奥村：内戦期における共産党の勢力というのは　、やっぱりいわゆる旧満州国軍の力によるものが大きいと思います。徴兵などもやって、やっぱり逃げだりする人もかなり出ていますから。それから土地改革も結局いろんな手段を使って、やっぱり農民にとって兵士に出ざるを得ない状況になります。土地改革で「減租減息」という建前を使って、やっぱりいろんな口実を使って、有力者に罰金を取るとあわせて、功績のあった者に優先に分配するというかたちです。これに関する研究はこれからもっと事例を使い、究明してきたいと思いますが、最近見ている限りではどうもそういう感じであります。

馬場：国共内戦の時に、基層から動員することがあるんですか。

奥村：それは多いと思います。一応動員・徴発があるんですけど、（共産党・国民党）両方とも逃げちゃうというケースもあります。やっぱり国民党の方が補充が大変だし、正規軍じゃないとだめですから、結局だんだん弱くなってくる。そうすると、1947 年 5 月ぐらいですか、もう維持できないという状況が見えてくるわけです。その辺たり、共産党は義軍という形で東北軍を収容する。その挙句は、朝鮮戦争の時に四川省出身の兵士が多かったというのは結局共産党が四川で調達じゃなくて国民党軍の日中戦争以来の四川省からの兵士が寝変えて共産党の軍隊に再編されたのが、朝鮮戦争の時に使われたということです。

森：次回の研究会は、6 月 25 日とします。

おわり